カナダ英語小史

三宅　亨

はじめに

カナダ英語は，しばしばイギリス英語とアメリカ英語との混り合った言葉であるといわれている。第一印象では，そういった特徴は確かに認められる。アメリカを経由してカナダの街に入ると，通りの看板や掲示に“CENTRE”とか“THEATRE”といったアメリカとは違った綴りが用いられていることに誰でも気がつくであろう。観察力の鋭い旅行者であれば，“TIRE CENTRE”というカナダ独特の表示を見つけることができるかもしれない。“tire”はアメリカ風の，“centre”はイギリス風の綴りであり，一つの語句の中に英米両語の綴りが共存している顕著な一例である。テレビのニュース番組を見ていると，若いアナウンサーやレポーターのアメリカ英語（に近いカナダ英語）が聞けると同時にトロントやオタワからのイギリス発音の特徴を備えた英語による報道が飛び込んで来る。

このような現象が現れるのはカナダという国の歴史的および地理的要因に由来するものであるが，カナダ英語の起源については，今日でもはっきりとした定説はない。イギリス英語の伝統を直接に受け継いだものとみなす説もあれば，アメリカ英語の一変異形（regional variety）にすぎないとみなす説もある。本稿では，カナダの歴史を振り返りながら，カナダ英語の発達の足跡と性格の解明を試みたい。

1．北米植民地の歴史

1492年のコロンブスによる航海は西洋諸国による新大陸進出への先駆けとなった。1497年には英国王ヘンリー7世の命を受けたイタリア人のカボット（Giovanni Caboto，英語名 John Cabot）が北米探険に赴き，ニューファンドランドやケープ・ブレトン島近辺を周航し，さらにヴァージニア付近に達し，後年これらの地域をイギリス領とするきっかけを作った。1534年にはフランス国王フランソワ1世の命を受けたカルティエ（Jacques Cartier）がセント・ローレンス川を遡り，ガスペ半島（現ケベック州）に至り，この地域をフランス領と宣した。彼は計3回にわたりこの地域を探険し，植民を計画したが成功しなかった。[1)]

当時の西洋諸国は黄金と香辛料を求めて東洋への道を競いあっていたが，やがて新大陸に植民地を築き開拓を試みる動きも出てきた。1607年にヴァージニアに英国最初の植民地が作られ，[2)] 1620年にはメイフラワー号でマサチューセッツに到着した清教徒の一団がニューイングランド植民地の基礎を作った。一方，1608年にフランス人シャンプレーン（Samuel de Champlain）が現在のケベックに要塞を設け，毛皮交易とカソリック教普及を目的としたフランス植民地経営を開始した。彼の試みは様々な困難に直面したが，1663年にはルイ14世が国家として本格的に植民地ヌーベル・フランス経営にのり出した。後のフランス系カナダ人（francophones）の核となる移民が入植し始めたのは，この頃である。

英仏両国は早くからニューファンドランド地方の豊かな水産資源に注目していた。[3)] フランス人はここで取れた魚を主として塩漬けにして保存し本国へ輸送したが，イギリス人は乾燥保存法を用いた。そのためには魚を干す陸地（fish-drying centre）を必要とするので，はじめは大西洋岸に夏の間だけ一時的に滞在していたが，やがてセント・ローレンス川沿いにもイギリス人が定住するようになり，以前から入植しているフランス人との衝突が避けられない状況になっていった。さらに両国は漁業だけでなく毛皮交易におい

ても対抗するようになった。1670年には英国王チャールズ2世の勅許状を得て，ハドソン湾会社（Hudson's Bay Company）が作られ，フランス植民地にとっては強敵となった。

両国の衝突は1613年のイギリスによるポール・ロワイヤル襲撃をはじめ17世紀の当初からみられたが，本格化するのは17世紀末である。17世紀末から18世紀後半にかけて，北米大陸では英仏間の植民地戦争が何度か繰り返されたが，この背景には常にヨーロッパにおける本国同士の戦争があった。ヨーロッパでのアウスブルグ同盟戦争（1688～97）中はウィリアム王戦争が，スペイン継承戦争（1701～13）中にはアン女王戦争が，オーストラリア継承戦争（1740～48）中はジョージ王戦争が，七年戦争（1756～63）中はフレンチ・アンド・インディアン戦争が，ほぼ同時期に北米において戦われた。

七年戦争（およびフレンチ・アンド・インディアン戦争）は，英国の勝利に終わり，1763年のパリ条約により，ミシシッピー川の東，北はハドソン湾から南はメキシコ湾まで，フロリダを除く全域が英国領となった。すなわちカナダ（ほぼ現在のオンタリオ州より東の地域）がイギリスの領土となったのである。[4] しかし，当時のイギリスにとってケベックやモントリオールはせいぜい毛皮交易上の拠点程度の重要性しか持たず，少数のイギリス軍人や商人を除いて，フランス人住民が圧倒的に多い地域であった。やがてアメリカ13植民地の本国への不満が高まるにつれ，北への波及を恐れたイギリスは1774年にケベック法によってフランス系住民の信仰や法律・慣習などの「フランス的事実」を認めることにした。今日カナダで英語とフランス語の二つの言語が公用語とされ，カナダ英語の中にフランス語の影響がみられるのは，このような事情が背景にある。

2．北米英語の発達

17世紀に北米大陸に移住した英国人は当時のイギリスで使用されていた英語を話していたが，時が経つにつれ，次第に新大陸の実情にあった「北米英語（North American English）」とでもいうべき変異形が発達していった。

未知の大陸での新しい状況に直面した移民たちは，先住民や他の言語の語彙を借用したり，既存の英語の語彙に新しい意味を付与したり，造語に頼って自らの語彙を増していった。18世紀中頃には，まだアメリカ合衆国およびカナダという独立国は存在せず，北米東海岸を中心とする英国の植民地では，多少の地域差はあるものの，ほぼ同じような英語が使用されていたと考えられる。

1775年には母国イギリスに「反乱」したアメリカ13植民地の人々が立ち上がり，独立戦争（1775〜83）が戦われたが，当時の米植民地住民の3分の1は独立に反対していた。母国に忠誠を誓う人々のうち，約5万人は本国へ帰るか，西インド諸島の英植民地に移住したが，約4万人の人々はカナダへ逃れた。[5)]

カナダへ逃れた“the United Empire Loyalists”と呼ばれる人々のうち3万2千人は北東部のノバ・スコシア植民地へ，8千人が北のケベック植民地へ移住し，やがてこの国のイギリス系住民（anglophones）の中核を形成することになる。[6)] アメリカ独立後もアメリカからの流出は続き，米加戦争（the War of 1812）の頃には五大湖周辺には5万人の Loyalists や Post-Loyalists が住んでいたという。

この Loyalists が持ち込んだ言語は，当時のニューヨークやペンシルバニアに居住していた人々の言語，すなわち北米英語である。今日のカナダ英語の起源をアメリカ英語に求める人々の根拠はここにある。

独立に反対し，あくまで本国イギリスの統治下にとどまることを選んだカナダ植民地では，当然言葉の上でもイギリスの影響を受け続けることになった。本国との政治的および経済的な繋がりに加えて Loyalists の反米親英感情[7)]も手伝って，イギリス英語の威信（prestige）がカナダの英語に影響を与えたという［McConnell, 1979:9］。

19世紀になると，Loyalists の数を圧倒する大量の移民がイングランドだけでなくスコットランドやアイルランドからやってきた。1825年から1846年の間に50万の人々がイギリス諸島（the British Isles）から移住してきた。

1846年のアイルランドのジャガイモ飢饉の年には10万人のアイルランド人がカナダへ移住している。1867年のカナダ自治領の成立（Confederation）を経て，1871年には英国系と称する移民の数は2百万以上に達していた。これらの人々の話す英語がカナダ英語の発達に貢献したことも忘れてはならない。

1828年の Upper Canada の議会（Legislative Assembly）の構成をみると，アイルランド生まれ4名，スコットランド出身6名，他の英国植民地生まれ3名，カナダ生まれ13名，アメリカ生まれが15名である［Avis, 1966: 20］。

Scargill（1977:45-47）によると，カナダ英語の特徴とされる発音は，18世紀の英語の発音であり，子供の頃に身につけた発音を持って19世紀前半にこの国へ来た移民の影響によるものである。例えば，ant と aunt を同じように発音するのはカナダ英語の一特徴といわれるが，この二語が今日のいわゆる標準英語における発音に変化したのは18世紀末のイングランド南部においてであった。当時の北部イングランドやスコットランド，アイルランドではまだこの二つの語は同じように発音されていたのを，移民たちはそのままカナダへ持ち込んだのである。また，out や write の母音を，それぞれ［əu］と［əi］と発音する[8]のも，この当時の移民のもたらした英語の名残りである。

一方，地理的に隣接したアメリカからの影響も途切れたわけではなく，当時から今日に至るまで続いている。ウッズ湖から西方は北緯49度で米加国境線が引かれているが，ロッキー山脈まで国境線が定められた1818年以降も単なる想像上の線に過ぎず，また1846年まではロッキー山脈から西海岸の間は英米共同管理下にあり，両国の間の自由な往来が行われていた。このためにアメリカ英語との接触は常に失われることがなかった。1858年，現ブリティッシュ・コロンビア州のフレーザー川で金が発見された時には，2万5千人の人々がカリフォルニアを中心とする地域から押し寄せた。カナダ自治領結成以降も西部の平原諸州（the Prairies）開拓は遅々として進まなかったが，19世紀末に大陸横断鉄道が開通し，東からの国内移住者に加えてイギリス諸島

およびヨーロッパ大陸からの移民が定住し始めたが，南のアメリカからも人口流入がみられる。ちょうどアメリカでは「フロンティアの消失」と言われた時期にあたり，人々の関心が北の広大な未開拓地へ向けられ始めていた。1900年から1915年までに百万近くのアメリカ人がアルバータやサスカチュワンへ移住した。アメリカ英語[9]はカナダ人の生活の中に常に存在していた。

Bailey (1982:144, 148) は，現代のカナダ人が Loyalists の廉潔と愛国心を認めるあまりに彼らの数と影響力を過大評価する傾向があるとし，次のように述べている。

> Upper Canada was a British province, and as the population grew, direct migration from Great Britain increased the influence of the English of the "mother country" on the language of Canada. But though British models and affection for things English may have influenced the more prosperous and those near the centers of government in Upper Canada, the American model continued as the major source of influence.

当然のことながら，カナダ英語は先住民[10]の言語やフランス語の影響をも受けている。ここにもアメリカ英語との違いが生まれる要因のひとつがある。caribou (1665初出)[11] や sockeye (1869初出) といった新大陸の珍しい動物の名前は先住民の言語から借用したものである。pemmican (1743初出) はアルゴンキン・インディアン (Algonkian) の言葉である。parka (1784初出) は，ウラル語族のひとつサモイェード語からロシア語を経て，アリューシャン列島付近に住むアレウト族によって伝えられ，英語に取り入れられたという複雑な歴史を持つ。portage (1761初出) や rapids (1761初出) はフランス語からの借用である。cul-de-sac は道路標識に用いられている。先住民の球技から発達したスポーツは，競技に使用する棒の形状からフランス人によって当初 la crosse と呼ばれ，やがて lacrosse (1821初出) となった。

もちろん，カナダ英語独自の語彙や意味も発達した。riding は，スカンジナヴィア語から英語に入り，英国ヨークシャー州では行政区画を表わすの

に用いられていたが，カナダでは「選挙区」（1792初出）の意で用いられ，毎日の新聞紙面に登場するなじみ深い言葉である。同じ政治用語で，premier は通例 prime minister の略とされるが，カナダでは前者は「州首相」後者は「連邦政府首相」を指す。Chesterfield と聞けば，イギリス人は外套を思い浮かべ，アメリカ人はタバコの銘柄と思うかも知れないが，大多数のカナダ人にとっては「ソファ」を意味する。また，kerosene（1852初出）はギリシア語からの造語であり，insulin はカナダ人の発明になるものでラテン語からの造語である。「菜種（油）」を表わす canola は，英語の rape または rapeseed の語感が悪いので Canada と colza（フランス語「菜種」）の合成で生まれた商標から一般名詞化したものである。最近の造語には，憲法論議の中で生まれた動詞の patriate とその名詞形 patriation がある。[12]

3．カナダ英語をめぐる論議

我々が「アメリカ英語」とか「イギリス英語」などという言葉を口にする時，その共通点よりも相違点のほうに注目してしまい，まるで異なった言語であるかのような印象を与えてしまうことがしばしばある。実際には共通点のほうがはるかに多いから英米人の間にコミュニケーションが成立するのであり，両変異形が同じ「英語（English）」という言語名で呼ばれていることを忘れてはならない。このことは「アメリカ英語」と「カナダ英語」の間についてもいえることである。実際にアメリカ人とカナダ人が言葉上の相違点のために日常生活で意志疎通に支障をきたすとは考え難い。

そのために，カナダ英語の存在自体を否定するカナダ人も少なくない。今日のカナダ英語とアメリカ英語との間には類似点が非常に多いので，「いくつかの実例があっても，カナダの英語が本質的に他の英語と違うという事実に［多くのカナダ人は］全然気づいていないのである。彼らは，カナダ英語が単に隣のアメリカ人の使っている言語と同じ表現方法だと思っている」[Fortin, 1983: 259]。言語学者の間ですらカナダ英語の独自性を主張する人は少なく，アメリカ英語の一変異形にすぎないという見解のほうが主流であ

るようだ。[13)]

一方，カナダでは，もともとイギリス英語が使用されていたが，南の大国アメリカからの影響で段々アメリカ化されたのだという見方をするカナダ人もいる。特に，何かにつけアメリカに対抗心を燃やし，独自性（national identity）を強く意識している愛国的なカナダ人の間では，自分たちの言語はもともと純粋なイギリス英語であったが，アメリカ英語によって汚染されたという考えがある。しかし，既にみた歴史的事実に照らしてみると，この「汚染説（contamination theory）」は受入れ難い。

Loyalists は「イギリス」に忠誠を誓って「カナダ」へ移住した「アメリカ」人であったが，彼らの使用していた英語は純粋のイギリス英語ではなかった。同時に，彼らの英語を単純にアメリカ英語と同一視する考えにも筆者は賛成できない。カナダ英語の出発点において Loyalists の英語が果たした一定の役割は認めなければならないが，それだけで今日のカナダ英語の特徴について説明しきれるものではない。Scargill（1977:10）は，19世紀前半の大量移民のもたらした英語をより重視し，カナダ英語とイギリス英語との差が生じたのは，その頃からであると主張する。

カナダ英語は，単にアメリカ英語とイギリス英語が混じり合ってできたもの（a mongrel mixture）ではなく，北緯49度より北の地域で独自の制度や文化の下で発達したものである。カナダの土壌に育った独自の要素を見落としてはならない。今日のアメリカ英語に比べるとまだイギリス英語の影響の残っている18世紀の「北米英語」から分化した後も，本国のイギリス英語の影響を受け続け，先住民の諸言語とフランス語に加え，19世紀以降のヨーロッパからの移民の影響を受け入れたために，アメリカ英語の影響を常に受けながらも，アメリカ英語との違いが生じたとみなすべきであろう。

ユーモアを前面に押し出した Orkin（1988:10）は，カナダ英語について多少皮肉を込めて次のように述べている。

> Most English Canajans, although they are able to write English, talk Canajan, the nash null language of English Canada. As with

Joual, no formal instruction in Canajan is either given or necessary. Who would need it? All Anglos speak Canajan from birth.[14]

4．現代カナダ英語

今日，カナダの人口の90%は国境線から200マイルの範囲に住んでおり，日常生活の隅々まで「国境の南の巨象」[15] であるアメリカの経済力・文化的影響を受けている。街にはアメリカの商品が溢れ，家庭ではテレビのチャンネルをひねるとアメリカの番組のほうがカナダで制作された番組よりも多いという現実がある。カナダの学校における英語教育は長い間イギリス英語の色彩の強いものであった。しかし，公文書や学術書などを除くと，今日一般のカナダ人が日常生活で接する多くの活字メディアはアメリカ英語の影響を強く受けている。[16] このような状況下で，カナダ人が英語の使用面で一種の double standard を持っていることは想像に難くない。

McConnell (1979:19) は言う。

> . . . Canadians share much vocabulary, both old and new, with the people of the United States. Canadian English is basically of the North American variety. But Canadians also share in the innovations and usages of the British. Most Canadians, in fact, are bi-dialectal in at least *knowing* many of the variations, because they frequently hear or read them.

カナダでは，schedule という語をアメリカ風に［skédʒu:l］と発音する人が多いが，CBC 放送のアナウンサーはイギリス風に［ʃédju:l］と発音する。事実，筆者が1988年秋から1989年春にかけて実施した簡単な語法調査[17] でも，イギリス英語とアメリカ英語のいずれも用いるという回答者が少なくない。公式文書や印刷物では centre という綴りが用いられるが，バンクーバー近郊での筆者の調査では，centre のみを使用すると答えた人は19.1%に過ぎず，これに対して center のみを使用する人は34.0%，両方を使う人は46.8%である。カナダの鉄道はイギリス風に railway と呼ばれるが，railway

のみを使用する人は21.6%で，railroad は32.4%，両方を使用する人は45.9%である。

現代カナダ英語について広く信じられているもう一つの特徴は，地域差が比較的少ないという点である。カナダが世界第2位の面積を持つ広大な国であり，東西3千マイルにわたりお互いに山や川で隔てられながら様々な民族出自を持つ人々が生活していることを考慮すると，カナダ人の話す英語は極めて均一的（remarkably homogeneous）であるといわれている［McConnell, 1979:4］。この点については，広範囲にわたる実地調査は筆者自身も出来ないので諸文献に頼らざるをえないが，次のような反論もある。

Pringle（1985: 184-185）は，語彙の分野を除くと，カナダ英語についての調査はまだ余りされていないと言う。彼によれば，現在までに本格的な調査がなされたのはオタワとバンクーバーの2都市部に限られており，地方（rural Canada）についてはほとんど研究されておらず，地域差が少ないというのは表面的な印象による（impressionistic）判断に過ぎないという。ニューファンドランドやオタワ渓谷（Ottawa Valley）の方言調査の結果から判断すると，カナダ英語は極めて変化に富んだ方言を持つ，とさえ言っている。

Orkin（1971: 232）は「ニューファンドランドとオタワ渓谷のような不便な地域（relatively inaccessible terrain）」云々と言い，むしろこれらの地域はカナダ英語の例外であることを指摘している。ニューファンドランドは北米で最初に英語が使用された植民地であり，[18] アイルランドやイギリス西南部からの移住者によってほぼ完全な植民地となった。地理的に隔絶された，この地方の英語は北米の話し言葉の影響を少しも受けていないし，逆に他の地域の英語にも何等影響を与えることはなかったと述べている［同書，50-51］。[19]

いずれにせよ，包括的な方言研究がもう少しすすまないと，この点について断定的なことは言い難いようであるが，少なくとも東部を除いて都市部の英語の均質性はかなり高いようである。Pringle（1985: 183）自身は次のように述べている。

Canadian English is both extraordinarily various in its regional and second-language forms, and extraordinarily uniform in its urban form. Canadians celebrate (or mock) their diversity with a few well-known stereotypes of the non-standard varieties of Canadian English, and also deplore the poverty of the urban variety by poking fun at some recognizable traits of its impoverished form.

一般論として，教育の普及と交通通信手段の発達は一言語内の地域差の解消を促進する。オンタリオ州以西の Western Canada と呼ばれる地域の英語には均質性が高いという指摘があるが，これは19世紀後半に大陸横断鉄道が開通した後に急速に西部への人口流入と開拓が進んだためであると考えられる。カナダの経済構造を歴史的にみると，Central Canada（オンタリオおよびケベック）に対し東西カナダは従属関係にあるという二重構造になっている。鉄道によって急激に開けた西部の農業地帯と中央部とが直結され，それによって言葉の均一性が保たれていると考えることができる。

付け加えておくと，国内に主従の二重構造を抱えたカナダ経済は全体として，南のアメリカ合衆国へ従属するという二重構造をも構成している。このことはアメリカ英語のカナダ英語への強い影響と決して無関係ではない。

5．カナダ英語の将来

1988年秋に行われたカナダ総選挙の最大の争点は米加自由貿易協定であった。この協定は向こう10年間で両国間貿易の障壁を撤廃しようとするもので，これを推進するマルルーニー（Brian Mulroney）首相の率いる進歩保守党は，激しい選挙戦の末，議席を減らしたものの下院295議席中169議席の安定過半数を占め，自由貿易協定は1989年１月１日をもって発効した。

これまでもアメリカの経済的・文化的「侵略」に警戒心を抱いたり，反感を覚えているカナダ人は少なくなかったが，この協定の締結を機に一般市民の間にも不安が広がっていった。両国間の圧倒的な経済力格差からくる生活面での心配に加えて，文化の面でもカナダ人としてのアイデンティティが失

われるのではないかとの懸念がある。Newman (1988: 33) は次のように言っている。

> Living next to the United States has been reminiscent of an old-fashioned marriage, with the husband insisting, "If you do exactly what I want, dear, we'll have a really good time." Or, to switch metaphors, the Americans think of us (if they think of us at all) as an attic in their mansion. Attics tend to be taken-for-granted storage spaces somewhere up there, occasionally essential but a topic of concern only if they are the source of strange noises or cold draughts. If and when free trade is implemented, we will be moving down from the attic into American living rooms, or at least into their pantries. That is good reason to be very nervous. We will find ourselves thrown into the much tougher world of the international marketplace, having to make our way through Darwinian swamps of unfettered competition where survival of the fittest and the fastest is all that counts.

総選挙の最中に，自由貿易協定に反対する自由党が行ったテレビのスポット広告は極めて印象的なものであった。画面には，二人の男（アメリカ人とカナダ人）がテーブルをはさんで向かい合って交渉している。テーブルの上には，国境線が引かれただけの北米の白地図がある。アメリカ人のほうが，やおら消しゴムを手にして，国境線を消し去ってしまうという内容である。

この選挙用コマーシャルを見ながら，筆者はカナダ英語の将来を考えずにはいられなかった。いくつかの方言を残しながらも，やがてカナダ英語はアメリカ英語の大きな波に呑み込まれてしまうのだろうか。それとも，あくまでも Canadian identity を維持しながら，アメリカ英語と共に新たな北米英語を形成していくのであろうか。

Loyalists の時代以来常にアメリカ英語の影響を受けてきたカナダ英語は，とりわけ第二次大戦以降一層アメリカ英語の色合いが濃くなってきたという

指摘がある。子供たちはテレビの影響で無意識のうちにアメリカ英語を身につけていく。かつては Oxford 系を中心にイギリスの辞書や文法・語法書をよりどころにしていたが，今日では Webster 系をはじめとするアメリカの辞書や文法・語法書に規範を求めることが多くなっている。[20] 今回の自由貿易協定発効でアメリカ英語の影響はさらに大きくなるものと思われる。Quirk *et al.* (1985: 21) の予測するように，これからもアメリカ英語への傾斜が進んでいくのではなかろうか。

む す び

この小論では，カナダの歴史を振り返る中で，カナダ英語の起源と発展の跡を辿ってみた。18世紀の北米英語から枝分かれしたカナダ英語は，英米双方の影響を受けながら独自の英語を形成してきた。けっしてイギリスやアメリカからの「借り物」ではない Canadian identity を備えた英語を築いてきた。Pringle (1985: 187) は主張する。

> It is important to many Canadians to insist that Canadian English is different from American English. It has to be different, because Canadians are different.

しかしながら，変化・発達の過程で常に隣接する大国アメリカの影響を避けることが出来なかったのは事実であるし，交通通信網の発達した今日，そして今後もアメリカ英語の色彩を深めていくように思われる。カナダ英語とアメリカ英語の共通点は今後増大するであろう。世界的規模の英語使用の拡大化の中で，一部の言語学者は，やがて地域的変異形が多様化のために別々の言語へと分化してしまうのではないかと恐れているが，筆者はそのような立場を取らない。繰り返しになるが，教育の普及と情報通信網と交通網の発達は英語の地域差の解消と共通部分の拡大を促進しており，より深い相互理解の条件と可能性は高まっていると思われるのである。

〔注〕

1）カルティエが，セント・ローレンス川を上り，スタダコーナ（現ケベック市）という村の近くにさしかかった時，同行していたイロコイ族インディアンが「むこうに kanata（村落）がある」と言ったのを，地名と思い込んだところから「カナダ」の国名が生まれた，といわれている。

2）一時的な滞在地は，すでに16世紀にニューファンドランドに作られていた。下の注18を参照。

3）カボットの第2回目の航海（1498年）の後，この地方の水産資源がヨーロッパに伝えられたが，これに一番に目をつけたのはポルトガル人であると言われている。カナダ英語の語彙の中でも一番古い語の一つであるといわれる baccalo（「鱈」1555文献初出）はポルトガル語からの借用語。

4）すでにスペイン継承戦争の後のユトレヒト条約（1713）で，ハドソン湾，ニューファンドランド，アカディア（ノバ・スコシア）は英国領になっていた。

5）逆に，今日のカナダ領である東海岸からは独立賛成派がニューイングランド地方へ移住している［Bailey, 1982: 140］。

6）これを契機に，ノバ・スコシア植民地は1784年にニュー・ブランズウィック植民地と二つに分かれ，ケベック植民地は1791年にフランス系を中心とする Lower Canada とイギリス系を中心とする Upper Canada に分割された。

7）米加戦争でアメリカの進出を阻止したことは彼らの自信を高めた。

8）この発音は，アメリカのヴァージニア州東部，サウス・カロライナ州，ペンシルベニア州にも残っている。

9）本稿では，便宜上，独立戦争以降のアメリカの英語を「アメリカ英語」と呼ぶ。

10）カナダでは，インディアン（Native Indians），イヌイット（Inuit，いわゆるエスキモー），メティス（Metis，インディアンと西洋人，特にフランス系，との混血）を先住民（Native Canadians）と呼ぶ。

11）文献初出年は，いずれも *A Dictionary of Canadianisms on Historical Principles* による。

12）*Gage Canadian Dictionary*（1983）には下の例文を添えた項目があるが，

『研究社新英和大辞典』（第5版，1980）には収録されていない。

The British parliament voted in 1982 to *patriate* the Canadian constitution.

ついでながら指摘しておくと，英和辞典ではカナダ英語（ないしはカナダ起源の英語）の語をしばしば「アメリカ英語」あるいは「イギリス英語」として処理している。

13）『大修館英語学辞典』，p. 1050

14）Canajan＝Canadian, unsh null＝national, Joual＝（カナダ英語）Canadian French that is dialectal or uneducated

15）かつてトルドー（Pierre Trudeau）は，アメリカを象に，カナダをネズミに喩えたことがあり，これが一般の人々の間でも使われるようになった。ある時，彼はアメリカ人の聴衆を前にして次のような発言をしている。

"Living next to you is in some ways like sleeping with an elephant. No matter how friendly or even-tempered is the beast, if I may call it that, one is affected by every twitch and grunt."

16）英語のテレビ・ドラマの96％は外国製，カナダ人が英語テレビを見る時間の74％は外国のプログラムに費やされている［佐々木，1986: 180］。このため，カナダでは番組の国内制作に務めているが，市場の小さいことが悩みになっている。同様に出版業界もカナダだけの市場では採算が取れず，アメリカ資本によって「カナダ支店」化していく傾向がある。佐々木（同書，176）は次のような指摘をしている。

米国とカナダの間に貿易は往復し，投資もまた交流する。しかし，情報と文化の流れは，米国からカナダへの一方向である。米国で長足の進歩をとげた通信技術とマスコミ機能は，水が低地に流れるように，カナダに波及した。

17）この調査の結果については，いずれ稿を改めて論じる予定である。

18）1583年（一説では1588年），エリザベス1世の勅免状に基づき，Sir Humphrey Gilbert が上陸。McCrum *et al.*（1986: 177）によると，当初は夏の間だけ漁民が滞在し，厳しい冬の訪れる前に帰国していたという。またアイルランド英語が St. John's の主要言語となった。

19) ニューファンドランドがカナダの一部となったのは1949年である。

20) カナダ英語の一般辞典としては *Gage Canadian Dictionary* (1983) があるが，収録語彙に限りがあるために，しばしば英米の辞書に頼らざるを得ないという現実がある。また，語法・文法書の多くはアメリカの出版社による Canadian Edition であり，その実態は原典（アメリカ版）の一部をカナダ向きに書き換えただけのもの（perfunctory Canadianization）である。

参考文献

Avis, W. S. (1966) : "Canadian Spoken Here," in Scargill, M.H. and P.G. Penner (eds.), *Looking at Language*, W. J. Gage Ltd., 17-39

Avis *et al.* (eds.) (1967) : *A Dictionary of Canadianisms on Historical Principles*, W. J. Gage Ltd.

Avis *et al.* (eds.) (1983) : *Gage Canadian Dictionary*, W. J. Gage Ltd.

馬場伸也 (1989) :『カナダ』, 中央公論社

Bailey, R. W. (1982) : "The English Language in Canada," in Bailey, R. W. and M. Gorlach (eds.), *English as a World Language,* Cambridge University Press, 134-176

Brown, C. (ed.) (1987) : *The Illustrated History of Canada*, Lester & Orpen Dennys Ltd.

Fortin, C. (1983) :『今日のカナダ』, 上智大学カナダセンター

Malcolm, A. H. (1985) : *The Canadians*, Fizhenry & Whiteside Ltd.

McConnell, R. E. (1979) : *Our Own Voice: Canadian English and how it is studied*, Gage Educational Publishing Ltd.

McCrum *et al.* (1986) : *The Story of English*, BBC

McNaught, K. (1988) : *The Penguin History of Canada*, Penguin

Newman, P. (1988) : *Sometimes A Great Nation*, McClelland and Stewart Ltd.

大原祐子・馬場伸也編（1984）：『概説カナダ史』，有斐閣

Orkin, M. M.（1971）：*Speaking Canadian English: An Informal Account of the English Language in Canada*, Routledge and Kegan Paul ltd.

——,（1988）：*Canajan, Eh?*, Stoddart Publishing Co., Ltd.

Pringle, I.（1985）："Attitudes to Canadian English," in S. Greenbaum (ed.), *The English Language Today*, Pergamon Press, 183-205

Quirk *et al.*（1985）：*A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman

佐々木潤（1986）：『変わりゆくカナダ』，日本貿易振興会

Scargill, M. H.（1974）：*Canadian English Usage: Linguistic Change & Reconstruction*, McClelland and Stewart Ltd.

——,（1977）：*A Short History of Canadian English*, Sono Nis Press

（1989. 9. 28　受理）

A Brief History of Canadian English

Toru Miyake

Many people believe that the English spoken in Canada is a direct descendant of British English, while many others believe that it is a regional variety of American English. Canadian English is a variety of English which resembles British English in some respects and American English in others, but, more importantly, it includes a great deal that is significantly Canadian. The explanation of this mixed character lies in the settlement history of the country. The influx of the "Loyalists" at the time of the American Revolution and subsequent massive immigration from the British Isles and Europe have contributed to the history and nature of Canadian English. On the other hand, the constant influence of American English should not be ignored. In fact, there are many Canadians who fear that they may lose their own national identity under the strong influence of the United States on every aspect of their daily life. In the absence of strong resistance against Americanization, English in Canada seems likely to approximate to American English, or at least to develop a larger common core with its southern neighbor.